

## 授業の玉手箱

### 書籍紹介

#### 「韓国の英語授業」を参観して

東條 加寿子

9月8日から6日間、教職課程『教職フィールドワーク（韓国）』のプログラムで学生とともにソウルを訪れ、小学校から大学までの英語の授業を参観した。訪問した学校の状況で韓国の英語授業を一般化することはできないが、きわめて印象的な点がいくつかあった。

まず、小学校から、英単語の品詞をしっかりと教えていることである。韓国では小学校3年から英語が教科として教えられているが、私立学校では小学校1年（一部幼稚園）から英語が本格的に教えられている。（英語を教える幼稚園は教育熱心な保護者に大人気であることは想像に難くない。）参観した私立小学校3年生の授業は生徒12人程度の少人数クラス、ネイティブ教員によるオールイングリッシュのクラスである。ここでは、品詞の違いについて教え、名詞、形容詞や動詞の語彙を生徒から次々に引き出していた。タイマーで1分間をセットされ、生徒は知っている形容詞を順にどんどん発言していく。時間が経過するとプロジェクトで写し出されたスクリーン上でTime-bombが爆発する。名詞、形容詞、動詞の役割をしっかりと定義し、一つの文には必ず一つの動詞がなければならぬと教える。同じく小学校3年生のクラスでは、前置詞が扱われており、スクリーンには次のような穴埋め問題が示されていた。なかなかの難度である。

He walked slowly \_\_\_ the art table.

These shapes hang high \_\_\_ the floor. (選択肢:above, toward 他2)

一方、高校のリーディングのクラスでは、デジタルボードにテキストが映され、教師はスクリーンをタップすることで音声を出したり、次ページに進んだりすることができる。生徒たちは、まず音声を聞きながら文にスラッシュをいれ、次に教師が文法や語彙を説明しながら読み進めていく。韓国語を介した英語の授業で、日本の従来の授業と類似しているが、相違点は、文を順通りに読む進捗が速いこと。教師の問いかけに対して、生徒たちはコーラスで（声を合わせて）答えながらポイントをどんどん書き込んでいく。教師の問いかけは単語の意味や、文構造に関するもので、例えば allow がでてくると、“allow（教師）”“allow someone to do（生徒群）”、“permit（教師）”“permit someone to do（生徒群）”“request（教師）”“request someone to do（生徒群）”のように、同義語や類義語について次々と口頭で確認が行われる。授業テンポが速い印象は、電子黒板利用で情報が瞬時に示されること、指名して一人に答えさせる方式ではないため沈黙の時間がないことから感じとられるのだろう。教師の質問にクラス全体が即座に答えながら授業が進められる形態は、別の高校で参観した時にも見られたので、韓国の学校教育を通して規律化している形態なのだろう。

高校視察では、一つ面白いものを発見した。各教室の後ろに、高さが1メートルほどの高い机が置いてあるのだ。尋ねると、授業中、眠くなった生徒は自主的にテキストをもってこの机に移動し、立って授業を受けるというのだ。確かに、立ったままで寝るというのは至難の業、自ずと睡魔は去っていく。

いずれにせよ、日本にはない授業の「仕掛け」はなかなか興味深いものであった。授業参観を許可してくださった先生方、その生徒たちには心から感謝である。

#### 『私も「移動する子ども」だった』

川上郁雄（編著）くろしお出版 2010年 1,470円 224ページ

総務省の発表によると、2013年3月末時点での住民基本台帳における居住外国人は198万人であり、東京都・愛知県・大阪府などにおいては総人口における割合がいずれも2%を超えている。ここに含まれるのは、日本における滞在が3カ月をこえる外国人、特別永住者である（朝日新聞 2013.8.29 朝刊）。



経済のグローバル化にともない、ヒト・モノ・カネの行き来が量においてもスピードにおいても加速度を増す今日、特に本稿に最も関わるの深い「ヒト」の移動は、留学・就労・国際結婚の三要素において顕著である。これにともない、国境を越えて、必ずしも自分自身の国籍に関係なく「複数の言語環境を移動する子どもたち」の数も増えている。彼らの特徴は、本書の表現を借りると、以下の三点にまとめられる。

1. 親や子ども自身が、国境を越えて「移動」している
2. 二つ以上の異なる言語に触れながら、つまり、言語の間を「移動」しながら成長している
3. 外国語教育や母語教育などのカテゴリーの間を「移動」する

このような子どもたちは、社会的には「差別」や「いじめ」にあうことや、学業的には「成績不振」に苦しむこともある。何よりも、自己のアイデンティティをどのように捉えるか、形成するかという点で壁にぶつかるものも少なくない。本書ではその点にフォーカスして「自分の中にある多様な背景や複数の言語を一人の人間としてどのように受け止め、それを人間の生き方にどう生かしていくかというテーマ」（p.9）に、各分野の著名人へのインタビューを通して迫る。インタビューを書き起こすスタイルをとり、口語スタイルや繰り返しも含む、できるだけ話者からのオリジナル発話を記録している。このことから、読者は各人の What they speak という側面だけでなく HOW they speak という個性をも雄弁に語る側面についても知ることができる。

（夫 明美）



#### 編集後記 | 第26・27回勉強会案内

2020年の東京オリンピック開催が決まった。佐藤さんの招致スピーチは心を打った。.... What we have seen is the impact of the Olympic Values as never before in Japan. And what the country has witnessed is that those precious Values... Excellence, Friendship and Respect ... can be so much more than just words. 東北の人々にも元気を送りたい。言葉以上のことを届けられる教員でありたい。

##### \*\*\* 第26回勉強会「英語の教え方教室」 \*\*\*

2013(平成25)年11月16日(土) 14:00~7:00

「『英語の授業は英語で』を考える」

滋賀県立水口高等学校の吉野欽哉先生からの英語で行う授業の実践報告を下に、目の前にいる生徒にどう対応していくべきかを考えたい。全英連の日程と重なったが、熱気溢れる話し合いを皆さんとしよう。

##### \*\*\* 第27回勉強会「英語の教え方教室」 \*\*\*

2013(平成25)年12月7日(土) 14:00~7:00

「新課程「英語表現I」の授業をどう教えるか」

和歌山県立那賀高等学校の加藤統久先生にコミュニケーションの場を設定しその場面に応じた多くの英語表現活動を取り入れた授業の工夫を話して頂く。



大阪女学院大学・大阪女学院短期大学  
教員養成センター Teacher Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号  
Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojic/edu/ttc>  
e-mail: [ttc@wilmina.ac.jp](mailto:ttc@wilmina.ac.jp)